

平成29年度 福井県立清水特別支援学校 学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
1 教育課程 学習指導 研修	個別の教育支援計画を活用し、キャリア教育の視点からねらいや支援を考え、授業改善に取り組む。	キャリア教育の視点から授業改善に取り組むについて、教員の評価は、取組、成果指標ともに95.6%と目標指数を上回った。今年度から新たに願いから目標を立案する手続きを踏んで、個別の教育支援計画等を作成し、それらをもとに授業づくりを行った。そして全学部が2回ずつ、公開授業、授業研究会を重ねた結果と考える。今後もより内容の充実を図りつつ授業研究会の開催を継続していきたい。 自立を目指した指導についての保護者の評価は、ほぼ指導しているを含めて100%であった。将来の目指す姿の捉えにくさがあったり、家庭での支援につなげるまでに至らなかったりしたが、懇談会を通して、実態やねらいを確認し合えたことが評価につながったと思われる。今後は保護者のニーズを引き出し、保護者が主体的に取り組めるような懇談会のあり方を考えていきたい。	来年度の新たな校務システムの導入に伴い、個別の教育支援計画等の様式は未知数であるが、今後もキャリア教育の視点からこれまで同様の手続きを踏んで授業を考えていきたい。より保護者が参画しやすいように進路との連携を密にしていきたい。またさらなる授業の充実を図るためには、系統性や一貫性をもったカリキュラムの作成と運用が必須であり、今後は指導内容の検討を進めていきたいと考えている。
2 生徒指導	ヒヤリハットの事例やアクション報告などを活用し、健康で安全な環境作りに努める。 保護者と連携しながら、自分の体や健康を意識できるように児童生徒一人一人に合わせて支援する。	教員の評価は、健康・安全な環境作りにおいて「しっかりできた」「おおむねできた」と合わせると約95.6%であった。昨年度より毎月の職員会議後に情報共有シートを使い、児童生徒全員の情報を全教員が共有したり、職員朝礼のわずかな時間を利用して、リアルタイムに全教員に対しヒヤリハット報告を行ったりしてきたことで、児童生徒の性格や障害特性に関する情報の共有と理解が進み、事故の防止にも効果的であることから今後とも継続して実施したい。児童生徒の意識向上への支援に関しては、全校共通の健康観察カードの使用が促進されカードを介して自分の体調や気分等を教師に伝える場面が増えた。 保護者の評価では健康で安全な学校生活を送るための支援や環境づくりでは「しっかり取り組んでいる」「おおむね取り組んでいる」と合わせて95%であった。今年度より行事等における防犯対策として来校者のリボン着用や災害時の引渡訓練を実施した。学校と家庭の連携では「しっかり取り組んでいる」「おおむね取り組んでいる」を合わせて100%であった。防災・防犯対策の強化や、保健室来室者の保護者への詳細な情報提供、保健だより等を通じた啓発等が効果的であったと思われる。	教員には情報共有シートの活用やヒヤリハット報告等を通して、児童生徒の障害特性に係る健康安全面での情報共有と共通理解に努めるとともに、アクションカードを使った傷病者対応訓練や不審者対応訓練等を通して、緊急時における適切で臨機応変な行動が取れるように努めたい。 保護者に対しては「保健だより」等で健康安全面に関する情報提供を図るとともに、安否確認訓練や行事等における不審者対策、緊急メールを活用した引渡訓練等目に見える防犯・防災対策を進め保護者の本校の防犯・防災対策への理解向上に努めたい。
3 進路指導	より現実的に進路について考えていくために、学校、保護者、相談支援専門員の連携を深める。	児童生徒20名のうち18名について、学校、保護者、相談支援専門員の三者による話し合いを実施した。その結果、91%の教員が、児童生徒の将来の生活への希望や進路の方向性について考えることができたという回答をした。 三者で連携した取組が、卒業後の生活を考えるうえで「かなり効果があった」「効果があった」と回答した保護者は85%であった。その理由として、「進路について現実的に考えることができた」「教育と福祉で支援計画の共通理解を図ることができた」が最も多く、「学校・相談支援専門員との話し合いが一度にでき都合がよかった」という回答も多かった。一方で「効果がなかった」と回答した保護者からは、「学校で取り組んでいる様子の確認をただけのようで、卒業後に向けてという内容ではなかった」という点が理由として挙げられた。 今年度の成果としては、担任と相談支援専門員の繋がりができた点大きい。今まで一度も学校を訪問したことなかった相談支援専門員とも顔を合わせて話をするようになった。これにより担任が相談支援専門員の専門的な情報を得て、より現実的に進路について考えていくことができるようになった。今後の課題としては、三者による話し合いの内容の充実を挙げておきたい。	・まだ三者による話し合いを実施できていない家庭については、年度中に実施できるように調整したい。 ・来年度も、学校、保護者、相談支援専門員の三者が集まって話し合う場を設けたい。話し合いをより有意義なものにするため、事前に保護者にアンケートをとって、話し合いたい内容を聞いておきたい。また、話し合いの意義や話し合っしてほしい内容について、担任や相談支援専門員に明確に伝えるように努めたい。
4 支援	センター的機能の理解を深めるために、本校のセンター的機能に関する研修や取組を活用する。	教務部教員の評価では、センター的機能に関する研修の企画・運営に関してほぼ100%であった。また、全教員の評価は、センター的機能に関する校内外での取組の参加については、2つ以上の参加が95.6%で、センター的機能の理解と役割の自覚については、おおむね役割を自覚できたを含め95.6%という結果となった。今年度校務部が2部になったこともあって、教務部として新たな業務の遂行が危惧されたが、昨年度の支援部の先生方のリーダーシップのもと、多くの教員が携わって実施することができ、センター的機能の理解によりつながったのではないかとと思われる。また、今年度はこれまでコーディネーターを中心に開催されていた地域支援担当者会をオープンにしたことも要因の一つと思われる。今後センター的機能の充実のためにも、校内外問わず支援の質の充実や支援体制の構築を図る必要がある。	今後も本校教員が、特別支援学校におけるセンター的機能の意義や役割を理解し、特別支援学校教員として資質や相談力を高めていけるように、地域支援や相談業務に携わる研修を企画・運営していきたい。また、今年度同様、コーディネーターとしてのノウハウを校内の支援会議に活かしたり、多くの教員がかかわっている交流学習を活用し、指導内容や支援方法等を地域に還元したりしていきたいと考えている。

	<p>本校と交流相手校の目標に沿った交流及び共同学習を実施する。(小学部)</p>	<p>教員の評価では、小学部の全教員から本校と交流相手校の目標に沿った活動ができるように手立てを工夫することが「3つ以上できた」と回答を得た。また、相手校の教員からは「2回目では、ペアの子の事を考えながら準備や当日の運営に取り組めた。また会いたい、楽しかったなどの感想が多くあり、児童らに満足感があった。」「最初はとまどっていた児童らも、実際に接していくうちに共通点を見つけたり、考えが読み取れるようになったりすると、一緒に楽しそうに遊んでいた。」という評価を得た。保護者からは実施状況について「大いに満足」「おおむね満足」が合わせて100%であり、「同じ年の友達と上手に関われるようになった。」などの評価を得た。さらに、相手校の保護者に依頼した一言コメントには、「とてもよい経験ができた。」「誰とでも分け隔てなく一緒に楽しく遊べる環境を作っていくべきだと思った。」などの感想があった。本校への理解・啓発につながっていると思われた。</p>	<p>学校間交流相手校の教員から「1回目の事前学習で、本校児童についての明確なイメージを持たせることができると、1回目ももっと交流していける。」との意見をいただいた。自校が作成しているワークシートや出前授業の内容などを再度検討し、相手校教員とも話し合いをしながら考えたい。また、居住地校交流では、通常学級への出前授業がよかったとの意見を踏まえ、本校保護者にも出前授業の内容について御意見を伺いながら、来年度以降も実施したい。</p>
<p>5 地域との交流</p>	<p>総合的な学習の時間に生徒が交流相手と関わりながら活動できるよう工夫する。(中学部)</p>	<p>教員の評価では、交流相手と関わりながら活動できるように「4つ以上工夫した」教員が87.5%「3つ工夫した」教員と合わせて100%だった。また、50%の教員が「生徒が自分から相手校生徒と関わった」、37.5%の教員が「生徒が相手校生徒の関わりに応えながら活動した」と回答した。交流が2回あったこと、活動内容を、生徒達が好きな音楽や美術にしたことで、落ち着いて取り組むことができ、相手校生徒からの関わりをスムーズに受け入れることができたと思われる。交流相手校生徒の87.5%が活動の仕方を考え、実践できたと回答した。遠隔システムを利用して顔合わせができたこと、出前授業で関わり方を本校教員と一緒に考え、当日までに考えをまとめられるようワークシートを活用したことなどで、一人一人がねらいを持ち、より良い関わりにつながったと思われる。保護者の評価は、内容について、子どものニーズや実態に「適していた」「おおむね適していた」との回答が合わせて100%だった。懇談会等で生徒のニーズを丁寧に聞き取り、活動の様子を写真等で伝えたことなどが有効だったと思われる。</p>	<p>実際の交流は各校年に一度だが、作業学習での製品や、美術作品などを交換展示したり、遠隔システムを活用して交流したりするなど、交流の機会をできるだけ増やせるとよい。また、引き続き、活動内容や支援方法に工夫を重ね、よりスムーズで充実した触れ合いができるよう心がけていきたい。相手校生徒に対しては、出前授業でのワークシートを改良したので、今後も活用していきたい。本校保護者には、相手校の生徒の様子や変容も合わせて伝えていきたい。</p>
	<p>生徒が地域の人と関わりながら活動できるよう支援方法を工夫した交流及び共同学習を実施する。(高等部)</p>	<p>教員の評価では、生徒が地域の人と関わりながら活動できるよう支援方法を「4点以上工夫した」教員が80%「2点以上工夫した」教員が20%で合計100%であった。生徒が「交流相手校の生徒や地域の方と積極的に関わることができた」が60%「交流相手校の生徒や地域の方の働きかけに応じた」が40%で合計100%であった。交流相手校生徒が「どのように関わるとよいかを考え積極的に活動することができた」が48%「どのように関わるとよいかを考え少し活動できた」が52%で、合計100%であった。生徒の特性に合わせた関わり方について、相手校生徒に教員が丁寧に支援したことが有効であった。保護者の評価は、交流及び共同学習の実施内容や活動の様子について「満足している」が25%「おおむね満足している」と合わせて100%という回答を得た。交流の様子を連絡帳や学部だよりの写真で伝えたことが有効であった。</p>	<p>交流相手校生徒のアンケート集計では、交流に不安だった生徒達が「楽しかった」「関わることができた」「イメージが変わった」と肯定的に変化したことがわかった。今後も、活動内容や支援方法に工夫を重ね、生徒の特性に合わせた関わり方のモデルを教員が示し、本校生徒と相手校生徒の双方に有意義な触れ合いができるよう心がけていきたい。</p>
<p>6 運営 (多忙化解消の取組)</p>	<p>校内LANの活用による情報共有の推進や、会議資料の事前配付や事前精読により、業務や会議の効率化と時間短縮を図る。 ノー会議デーの設定や出勤自己管理表の活用による業務の見直しを行う。 校務部を2部に再編し業務の縮減、統合を進めることにより、教員の負担感軽減を図る。</p>	<p>業務や会議の効率化と時間短縮をねらいとする校内LANの活用については、「ほぼ行った」教員が39%、「できる限り」と合わせて91%であり、会議前の資料配付や精読については「ほぼ」が43%、「できる限り」と合わせて91%の結果となった。また、これらの取組の多忙化解消への効果については、「おおむね」が57%、「やや」と合わせると100%であり、取組の満足度は高いと思われる。一方で、校務部を2部に再編し教員の負担感の軽減を図ったことについては、「おおむね」と「やや」を合わせ74%と、やや低い結果となった。「たくさんのことに関わらねばならない分負担が増した」等の意見もあり、校務部の再編と合わせ、業務の見直しを進めることが今後の課題となる。</p>	<p>校内LANの活用や資料事前配付はかなり定着してきており、会議の効率化や時間短縮に効果を上げている。引き続き、連絡調整を密にしながらかつて効率的な運営を図っていききたい。 また、今年度再編した2部体制の校務部を次年度も維持しながら、合わせて各部での業務の見直しについて検討を進めていきたい。</p>
<p>7 運営 (人権教育の推進)</p>	<p>児童生徒の人権を尊重した教育活動が行えているか等について振り返る機会を設け、人権を意識した教育の充実に取り組む。</p>	<p>教員の評価では、まず、児童生徒への対応に関して学部やクラス内で共通理解する機会を持つことについては、「3点以上取り組めた」が44%で「2点以上」と合わせて87%であった。また、人権意識を高める機会については、「3点以上できた」の回答が39%で「2点以上」と合わせると96%であり、いずれも目標指数に達している。さらに、「児童生徒の人権について尊重した教育活動が行えたか」の設問では、「かなり」が52%であり、「おおむね」とした回答と合わせると100%であった。保護者の評価は、本校が人権を尊重した教育に「積極的に取り組んでいる」が60%で、「おおむね」とした回答と合わせると100%の結果であった。学校の取組への保護者の理解が少しずつ深まってきていると考えられる。</p>	<p>日ごろからの人権にかかわる情報提供や注意喚起、また、全教員を対象とした人権に関わる研修の充実等の取組を今後も継続しながら意識の向上を図っていききたい。一方、教員評価の中で「自分自身は意識できたが、話し合ったり注意を促したりすることができなかった」という意見も見られた。お互いに注意し合ったり何でも話せる職場の雰囲気づくりに取り組みたい。</p>